

# 夢窓幼稚園通信第8号

2022年4月28日



昨年のおまつりに、子どもたちはそれぞれ「にじいろのかぎ」を首から下げて、冒険の旅に出ました。

「はじまりの扉」を含め7つの扉を開いておはなしの国にはいっていったのです。

夢先案内人の役の「ゆめじい」として、私は今でも時々「にじいろのかぎ」を首に掛けて過すことがありますし、ネックレス代わりにして会議に出かけることもあります。私にとってはフィクションであるこれらのドラマは、夢物語であると同時に、最もリアルな心象世界でも、実際あるのです。

子どもたちは目ざとく鍵を見つけます。

昨年体験している子は「あ、にじいろのかぎだ！」「まほうのかぎ！」「これ、おっきいな！」…、はじめての子は

「これなに？」「なんのかぎ？」…などと

だいたいの子は、首から下げているので、私のおへそ辺りに鍵を当てて回そうとしますが、今日ある子は「えんちょうせんせいのめをあげよう！」と鍵を回しました。何だか今まで見えていなかったものが見えるようになりました。

「目が開いて…不思議なものが見えるようになったぞ」

「それじゃ今度は耳を開けてみよう！…素敵な音や声が感じられる」「鼻はどうか？…うん、いい匂い」

「口を開けたら…うれしい声や歌が生まれてくる」

「頭に鍵を当てて回したら…いいアイデアが湧いてきた！」

世界は魅惑的な不思議に満ちています。そしてまた、納得のいかない不可思議さも次々と現われてきます。

そんな世界に参入し切り開いていくための象徴としての道具は鍵ですが、同時に鍵は何よりも、世界と対峙する自分自身の可能性を開いていくためにあるのだと分かりました。

子どもたちは例えば「鍵」という道具の使い方を大人ほど上手には扱えなくても何に使うかはちゃんと知っていて、世界の扉を開け自分の扉を今日も開いて過していることでしょう。

「私自身がにじいろのかぎになって、少しでも世界に役立つ道をさがしたいと思う今回の体験でした。

園長 弁光 泰雄